浜松南高新聞
発行所
県立浜松南高校新聞部
静岡県浜松市米津町
印刷
浜松共同印刷株式会社

未来に向って

新たな夢を秘めて
悔いなき未来ある人生を

今年も多くの生徒が、三年間の高校生活を終えて、新しい世界に飛びたとうとしている。しかし、世の不況、国公立統一入試とその前途は決して明るくはないだが、その労苦に負けず、頑張って突き進んでもらいたい。

ご卒業を心よりお祝いします。卒業という言葉には、長い様で短かった三年間のすべてが凝縮しているのです。様々な思いが胸に去来し、消えていることでしょう。友との語らい、恩師との真剣な対話、スポーツ、生徒会の各行事それらのすべてが心の栄養として蓄積され皆さんを支えてきました。卒業というのは、想い出からの出発です。そこは新たな苦難の場、夢多い場なのです。そこには、予期されない現実が暗やみの様に迫っているでありましょう。しかしそんな時こそ、必ず今まで培かってきたその栄養が役立つのです。本校での三年間は、そのための準備の年月であったかも知れません。皆さんの中には、この三年間は"苦"だと思う人があるかもしれません。しかし、それが"苦"であればあるほど、今の皆さんを皆さんらしく恥えさせてくれたと思います。"苦あれば楽あり"という格言の通りに、それはそれなりの心の栄養として確実に自分のものとして摂取されてきたことでしょう。それをバネにしなければ、一体どこでその栄養摂取の成果を顕するのでしょうか。

南高校を一輪の花とたとえるなら、皆さんは一つ一つの種子です。名もない一つぶの種子であります。しかし、その種子には頑りない力と未来があるのです。それがどの様に開花するかは、心の栄養と皆さんの活動の成果如何です。太陽はサンサンと照りつけています。今、一輪の花からその孫大なる太陽を浴びて種子は四方八方へと飛び散るのです。その種子達は、夏のうだるような暑さに耐え、冬の厳しい寒風に耐えて、親以上の一輪の花を開かせてください。未来に向かって花弁を向け、偉大な太陽の光を浴びて人生の花を精一杯大きく、精一杯美しく開いてください。

卒業――心にうつりゆくすべてが純粋に、かつ懐しく浮んでくることでしょう。それをじっかりとつかみ取った瞬間、一輪の花より種子は飛び去るのです。三年間の心の栄養は、そんな種子の躍動力と変化して、皆さんの金庫にしみなぎることとなるのです。皆さんと過ごした月日は、一つのドラマとして、我々の目に焼きついています。そのドラマのラストシーンは皆さんの未来への力強い旅立ちです。我々の中に残された皆さんの映像は、優しさと厳しさとしていつまでも消えることはないでしょう。そして力強く四方八方へ飛び立つ未来ある種子に、我々は新たなる自覚を呼びさまされた気がします。皆さんの未来の幸と、すばらしい人生の花の開花を祈っています。長い人生を着実に歩いて下さい。

ます。それは、飛び立つ皆さんの最大の贈り物として、我々はしっかりと受けとめたいと思います。皆さんの未来の幸と、すばらしい人生の花の開花を祈っています。長い人生を着実に歩いて下さい。

厳しさ増す進路の中で

本年度の卒業生の進路状況をまとめてみた。まずは進学の面であるが、本年度の様子は次の通りである。例年通り、私立への出願状況が九、三倍と非常に多いのが特徴といえるであろう。

また国公立大の受験希望者は昨年に比べて少なくなっているが、一五一名である。大学別に出願数の高いものは一期校では名大（五）北大（五）三重大（七）、一期校では静大（一五）富山大（五）信州大（五）岐阜大（七）公立大では、横浜市立（七）である。受験戦争といわれる昨今であるが、希望する国公立、私大へ堂々と合格してもらいたいものである。南高校は受験校ではあるが、その雰囲気は決してそれらしくない。何か、甘い雰囲気に包まれている。それを打破し、己に勝ったものが最後に笑う者である気がしたならない。学部別に本年度の出願状況をみてみると、まずトップは学部（三二六）で、次いで経済学部（一九一）法学部（一四四）文学部（一〇三）などの順である。学部選択に当っては、自分の適性を知った選択が行われ、将来の自己形成のために最善の努力がはらわれたことを信じて疑わない。平均一人当りの出願数は、約五通である。力全の体制を敷いて受験に望んでいる様子が知れるというものであるが、この五通のうち本命校は唯一である。その本命校に寄々と胸を張って入学することが、自分の為であり、家族、ひいては学校への恩返しとでもいうものである。商業科からの進学者は、不況の世であるということが反映して、昨年より一八名も減っている。本年は三八名の者が大学進学を目指している。商業科の就職希望者は一四四名であるが、このうち一四一名のものは、すでに就職先が決まっている。昨年より、学校関係者及び個人の出足がよかったことが、効を奏しているようである。今回の中で特に注目を集めることは、すでに五名が内定しているが幼稚園への希望者が多かったということである。業種別に今回の就職状況を見ると、製造業（四五）卸売・小売業（三二）金融保険業（三二）サービス業（一四）などである。これもまた自分の将来を生かす選択でなければならない。自分の一生の仕事への選択であるから、自分を中心として、何度も父兄・先生との話し合いをもち、その結果が前記の様になったのであろう。最後に普通科・商業科の方々のこれからの発展を願って、本年度の進路状況を終えたい。

（　）内の数字は、一月十七日現在の出願数・及び内定数を示す。

出願状況	
国立大	120
公立大	31
私立大	925
短大	27
各種学校	19
計	1,122

学部別志望	
法学部	144
経済学部	192
文学部	103
工学部	316
他	367

論説
青春時代の課題

高校時代、いやもっと大きく一般的に、青春時代という時代において、われわれが、最も力をつくしてやらねばならないことがある。それは、友達をつくることである。一見やすいように思えるこのことでも、実に難しいことを、われわれは幾度となく体験してきたはずである。苦しみや悲しみに遭遇したとき、窮びの絶頂に立ったとき、自分の心を理解してくれる友を求めるのであるそんな友達を見つけることこそ青春時代の大きな課題なのかもしれない。

友達をつくることは、他人を見つめる中から芽ばえてくる。"あの人はこんな性格なんだ"と、自分なりにのみ込んだ瞬間今までの"観察の目"から、その人に対する"理解ある目"へと変わっていくものである。あの人と友達になりたい。話をしたい、そうした多くの感情が、やがて心の中に湧いてくるのである。友人を得ることは、そうした"観察の目"更には、"理解ある目"でその人を見つめることに始まるといってよい。そしてそれは、ただ見つめるだけでなく、ちょっとしたふれあいの中からその人のよさにふれ、自分の感情を相手に理解させていくことである。そうした中で一層友情なるものが育てられていくのである。

しかし、私にはこれはまだ第一段階にすぎぬと思えてくる。われわれは、もう一段昇華したことを追求せねばならない。それは、そうやって知り合った多くの友人の中から、親友を発見することである。われわれは、とかく友人のいい面、自分の優すべき面だけを見ていて甘んじようとしてしまう。表面だけのつきあいに執着して安堵してしまうのである。お互いにその馴れ合いの中から脱却できないでいたい。自分のすべてをなかなか友人の前で曝け出すことをしない。その理由は様々であるが、"この欠点をも相手が知ったら、きっと嫌われるであろう"などという一種の友人に対する恐れが最大の原因であるのではないかその為に、お互いに目に見えない心の部分に距離を置いてしまうのである。親友をつくるためには、この恐れをつき抜けねばならない。相手に全身でぶつかっていくのである。そうした、"衝突"の中から、互いを知り互いを深めていくことができるのである。恐れていてはならない。欠点をも含めた本当の自分を曝け出した時、たじろいでいてはならない。親友を得ることは、以上述べた様に苦難の技かもしれない。しかしそれは自分にない物を相手―親友に求めていくうちに、逆に相手にも少なからず影響を与えているのである。親友を得れ、培われていく。そんな親友を見つけることこそ大きな課題であるといえる。

親友を見つける課題は、一生の課題であるかも知れぬ。中にはその課題が中途のまま終わってしまう者も出てくるであろうその者は、宝を見つけることができないで一生を終し終えてしまう。老いてから、親友をつくることは難しい。だからこそ"衝突"の場の多い青春時代に見つけねばならない。

自分の回りを見てみるとき、多くの友がいる。その中で、この人こそは"私の親友"であると自負できる人は稀な者である未だそうできない人は"衝突"の場の中に金塊でぶつかっていくことが肝要である。そういう自分の中に、その人が没入し、同時にその人の心の中に、自分を没入させたとき、素晴らしい親友がつくられる。こうした親友こそ、生涯を通しての大きな心のよりどころとなるのであるしたがって、親友こそ心の宝なのである。

（M・O）

一年に思う

長いようで短かった昭和五十一年度の一年も、あと少しで終わろうとしている。各人それぞれにとっての一年はいろいろな事があったであろう。しかし、その想い出の楽しかった部分だけに執着していても向の進歩もありえない。

ここで、今一度この一年を振り返ってみよう。そうして、その中から生まれた反省を、これからの糧として役立てたいものである。

まず、学習面から見てみよう。北高・西高に次いで浜松地区で三位にランクされている我校ではあるが、果たしてこの一年は、その評価に見合うだけのものであっただろうか。答えは「否」であるであろう。入学当時に、三位の実力を持っていたとしても、それが、いつまでも続くわけではない。

「井の中の蛙、大海を知らず」のたとえ通りにならないようにしてほしい。現に、潮見高校という強力なライバル校が追いついてきているのだ。

次にスポーツ面を見てみよう。概して、南校の部活動は実体である。勝った試しがいつでも、一、二回戦、よって、回戦程度のものである。その中ではハンドボール部が非常に頑張った。

男子は、インターハイに出て出場し、女子も好成績を残した。

スポーツというものは、精神、真剣さで決まるのではないか。甲子園に出場するような学校の野球部や、今年の全国選抜優勝をなしとげた、静岡学園のサッカー部の練習は、我々の程度からは想像もできない程、厳しさと真剣さに満ちている。その迫力が、どこまで強くなった細田であろう。その気迫が我々にはかけるのである。更に活性部活という雰囲気を増加させている。自分で選んだ道だから、各自が真剣に取り組んでいってほしいものである。

最後に、生活面である。今年は金銭的に、多くの不祥事が発見された。高校生の身で、飲酒・喫煙等を行う者が数多くいる。高校生にとって、そのような事が、必要であろうか。高校生に、それは、体はもう一人前である。父親との裸の話し合いで飲むのなら、構わないが、単なる好奇心だけで、仲間同士集まって、騒ぐというのは、真剣さの欠如である。

高校生活は、人生の課題である。それを、培われていく。そんな友を見つけることこそ大きな課題であるといえる。

親友を見つける課題は、一生の課題であるかも知れぬ。中にはその課題が中途のまま終わってしまう者も出てくるであろうその者は、宝を見つけることができないで一生を終し終えてしまう。老いてから、親友をつくることは難しい。だからこそ"衝突"の場の多い青春時代に見つけねばならない。

自分の回りを見てみるとき、多くの友がいる。その中で、この人こそは"私の親友"であると自負できる人は稀な者である未だそうできない人は"衝突"の場の中に金塊でぶつかっていくことが肝要である。そういう自分の中に、その人が没入し、同時にその人の心の中に、自分を没入させたとき、素晴らしい親友がつくられる。こうした親友こそ、生涯を通しての大きな心のよりどころとなるのである。したがって、親友こそ心の宝なのである。

（M・O）

時を忘れて
予餞会

長いようで短かった昭和五十一年度の一年も、あと少しで終わろうとしている。各人それぞれにとっての一年はいろいろな事があったであろう。しかし、その想い出の楽しかった部分だけに執着していても向の進歩もありえない。

ここで、今一度この一年を振り返ってみよう。そうして、その中から生まれた反省を、これからの糧として役立てたいものである。

まず、学習面から見てみよう。北高・西高に次いで浜松地区で三位にランクされている我校ではあるが、果たしてこの一年は、その評価に見合うだけのものであっただろうか。答えは「否」であるであろう。入学当時に、三位の実力を持っていたとしても、それが、いつまでも続くわけではない。

「井の中の蛙、大海を知らず」のたとえ通りにならないようにしてほしい。現に、潮見高校という強力なライバル校が追いついてきているのだ。

次にスポーツ面を見てみよう。概して、南校の部活動は実体である。勝った試しがいつでも、一、二回戦、よって、回戦程度のものである。その中ではハンドボール部が非常に頑張った。

男子は、インターハイに出て出場し、女子も好成績を残した。

スポーツというものは、精神、真剣さで決まるのではないか。甲子園に出場するような学校の野球部や、今年の全国選抜優勝をなしとげた、静岡学園のサッカー部の練習は、我々の程度からは想像もできない程、厳しさと真剣さに満ちている。その迫力が、どこまで強くなった細田であろう。その気迫が我々にはかけるのである。更に活性部活という雰囲気を増加させている。自分で選んだ道だから、各自が真剣に取り組んでいってほしいものである。

最後に、生活面である。今年は金銭的に、多くの不祥事が発見された。高校生の身で、飲酒・喫煙等を行う者が数多くいる。高校生にとって、そのような事が、必要であろうか。高校生に、それは、体はもう一人前である。父親との裸の話し合いで飲むのなら、構わないが、単なる好奇心だけで、仲間同士集まって、騒ぐというのは、真剣さの欠如である。

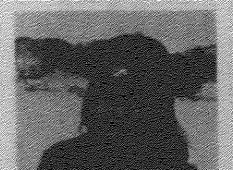
高校生活は、人生の課題である。それを、培われていく。そんな友を見つけることこそ大きな課題であるといえる。

親友を見つける課題は、一生の課題であるかも知れぬ。中にはその課題が中途のまま終わってしまう者も出てくるであろうその者は、宝を見つけることができないで一生を終し終えてしまう。老いてから、親友をつくることは難しい。だからこそ"衝突"の場の多い青春時代に見つけねばならない。

自分の回りを見てみるとき、多くの友がいる。その中で、この人こそは"私の親友"であると自負できる人は稀な者である未だそうできない人は"衝突"の場の中に金塊でぶつかっていくことが肝要である。そういう自分の中に、その人が没入し、同時にその人の心の中に、自分を没入させたとき、素晴らしい親友がつくられる。こうした親友こそ、生涯を通しての大きな心のよりどころとなるのである。したがって、親友こそ心の宝なのである。

（M・O）

先生の高校生時代



鈴木萩乃先生の高校生時代

自然と孤独の間に

鈴木萩乃先生

私は、ほんの幼い頃から、ひとりで動き廻る事が好きでした。

防火用水の金網越しに、浮き草を突いて、深みに浮ける小魚を見話していたり、家人に黙って電車に乗って、原っぱのある駅に降り、草原に横たわっていた。水色の小花を摘んで帰り、玄関に置いたその花が枕もとに寂しく浮かべて寝入ったり、山桃の熟れた実のポタポタと落ちる下で耐え切れなくなった左頭部を薬つぼで処理してすまして行きました。天に風がさわぐ秋の朝家の近くの椎の林で、実を拾いました。

その頃、一方では書の習慣が身についてきていました。他校生は、出し渋りしていました。学校生活は、個人主義を徹底したい本心と、生徒会役員、クラス委員としての、義務感との間で心は分裂し、家庭でも同じような事で苦しみつつ、結局はうまく偽装する偽善的な自分に苦しんでいましたので、とかく少しでも早く現状から飛び出したいと思っていました。

こんな訳で、自然とは遠くなり心は分裂し混沌としたまま、過ぎてしまった高校時代ですがそれはそれでよかったのです。

今、私は優しくありたいと思っていますが、その為には、多くの寂しさの体験と自己分裂の苦しみを必要とします。だからあの頃を大切な日々だったと感じています。

フライパンでいって家人にさし出して、嬉しかった事もありました。

そうした自然との優しい交感の日々が、吹き過ぎた風の様に秋から消えてしまったのが、高校生の時でした。

既に美術大学に進学意志を持ち、物の形や色や動きに注意深くなっていたのですが、時間と競争する習慣の人間になっていました。

取材日記
将来は大物か

萩乃記者

新聞部の取材の為、生徒会室へ行く人達につきそって、どんなところかと心中期待で、ドキドキワクワク、感想は、とてもさわやかで明るいところ。"気軽に呼び出して下さいよ"との、はり紙が目気軽な役員たちばかり。皆さんも、時々のぞいて話し相手になってもらったらいかが。

萩乃記者

今日は、風のつよい行グランドの草むしり。皆、寒さに耐えて、ひたすら姿が見られた。一度自転車置き場をのぞいては、ひたすら通学者の中には、三年生がいなくなると自転車の数がぐっと減ったなあ！」との声。我が南高校、学校行事が徹底していない面もあるが私達が注意していくようにしよう。

萩乃記者

ある部の部長に、新聞記事を書いていただこうと頼みに行った。新聞部員でさえ記事の行数に頭を悩ませるものだ。それを素人の方にやらせようと言うのだから、あつかましい。しかし、部長は新聞部員。ねばる決心で行ったところ、部長はあっさりオーケーの返事。この部長氏将来なかなかの大物になるかも……。

萩乃記者

今日は、自転車点検の日だった。それとは知らぬ自転車通学者。一度自転車置き場をのぞいては、ひたすら姿が見られた。「

積極的な活動を

次期生徒会に夢託す！

高林希昌会長を中心とした、後期生徒会も、今学期いっぱいで任期を終了する。

この後期生徒会は、前期に比べて文化展、体育大会などのような大きな行事もなかったため、その存在が薄くなりやすい。そのため、後期は特に、「生徒間の交流を深め、生徒会への関心を高める」

という目的において、昨年十月より活動を始めた。

まず、土曜日の放課後を利用し定例会がさかんに行われた。この定例会についても、種々の問題点を残しているが、「生徒による生徒の為の生徒会」を目指し、活動を続けて来た。各役員の方々に後期生徒会活動に対する反省を述べてもらうことにしよう。

▼会長　高林希昌　25ＨＲ

あの悪夢のような立会演説会から、早五ケ月が過ぎようとしている。

一体この五ケ月間に何をして来たのだろうか。個人的に言わせてもらえば、大変おもしろい体験をさせてもらった。貴重な友人を得ることもできた。もっとも成績はニュートンの法則を表わしたが。

しかし「生徒会長」という公的立場として、充実した五ケ月間であっただろうか。その立場から言えば悔いの残る五ケ月間であった。もうこのような体験をすることは、二度とないなろう。本当に楽しかった。惜さんありがとう！

▼副会長　鈴木孝宏　21ＨＲ

半年間生徒会活動をやって来たけれども、反省点ばかりが頭に浮んで来てしょうがない。スタートした頃は、半年間が長く感じられたが、三学期に入ってしまうとあれあれという日を送ってしまっていた気がする。

常に新しい試みを考え続けて来たけれども、又その考えというものを完全にするには、時間が足りなすぎた。だから我の理想の生徒会活動を、少しでも活発にするために私は、精一杯の努力をしたつもりだと自負し、又それを誇りとしたい思う。

次期生徒会に希望することは、生徒会役員が一体となって、生徒全員を、グイグイと引っぱって行ってもらいたい。

▼副会長　鈴木景子　29ＨＲ

生徒会の運営中、いるんだかいないんだかわからない。なんて言われていたんじゃあないだろうか。そう言われても仕方ないって認めなければならないのだろうけど、それも不本意な気がする。とにかく精一杯やったつもりだ。華やかに何か成功したという訳ではないのだけど。

でも、「副会長らしいこと」をやったかどうかは、大きな疑問だ。もっとも私の器じゃあないと思っていた せいだろうか。

私自身、役員をやってあの生徒会において何か変わったと思う。それを大事にして行きたい。

最後に、来年度副会長に望むのは、チームワークをバッチリ組む様リードしてほしいという事だ。

▼書記　浅羽比呂司　25ＨＲ

後期生徒会執行部役員という役に押もれて、そろそろ任期も終わろうとしている。

仕事の出来、不出来は、外から見て決めることで、一応の結果を果たしたとは思っている。内容的にどうだったかは、自信がないのだけど……。

とにかく数ケ月間、この役に携わってみて得たものは多かった。これが絶切に感じたのは、生徒会員と執行部の溝の深さだった。

僕、僕達のしている事を、異次元のものとして見ていた。今後これが解消するとは思わないが、今振り返ってみて、一抹の寂しさを感じずにはいられない。

▼文化委員長　鈴木章宏　23ＨＲ

弁論大会、二十三ＨＲ、太田正験に決った。

実は難しいことではない。下級生に正座させるなら上級生も進んで正座するということだ。楽しみも苦しみも共にすることだ。この心は、行動力を養ってくれるし、人間関係を滑らかにしてくれる敬心を持たせる。

他を言わずして左右できる自分とは、決して思いあがってはいない。先の学生の反応が早かったのは、彼の賢明さがそうさせたのだ。その様な学生と偶然めぐり合えた私は幸いであった。まかり間違えば、学生は反抗的に出たから知れぬのだ。恐らく、彼の人生の道は常識豊かな両親や友人、尊敬できる教師とか、武道の達人に恵まれていたのであろう。私には、良い結果になると確信して声をかけたのでもなければ、悪い結果を覚悟したわけでもない。只何となく近百年も前に作られた。生命をかけて作られた技が、生死の論を度外視して系統づけられる筈がない。現在異能力の発達の上に立って理論づけられた「武術」が「武道」と言い替えられたが故に現在が最も尚いと思うのは現代人の思いあがりであろう。先死の魂に打ちたてられたものは、殺人剣即活人剣なのであり、人間社会のさまざまりの生き方なのである。なるが故に武道の心は、現代に生きる。日常生活の中で生きる。現代人はそれに気がつかないことが多い。

空本武蔵は「平常心」を唱えて日常生活の中の心構えを説き、沢庵和尚は「不動智」の中で動かざるは、平常の絶えざる修練からこなることは滅多に有り得ない現実の中で、私は、武道を通してのみ存在するものだろうか。そうではあるまい。スポーツ全般に当てはめても、広く人間社会の生活そのものの中にも考えられることである。「武道」この語に特別の響きしさを感じる人があるかも知れない。スポーツの語にはげ親しみを持つ人があろう。風呂する人間ならば、同じ人間が作り行う、スポーツであれ武道であれ目標は一つだ。魂、精神が行きつく所は成なってはいまい。武道の理論づけは、いくらでも難しい言葉で説明はできよう。いわば、武道は殺人剣より出発した技で、哲学的見地に高められて活人剣と化したものだ。この理論は、既に何百年も前に作られた。生命をかけて作られた技が、生死の論を度外視して系統づけられる筈がない。

又この役をやったおかげで、いろいろな人に会った。寒い中を、水びたしになって、手伝ってくれた人達で、私にとって大変いい経験になった。

一回にわたって行った外まわりの清掃は、不十分ながらも、一番成果があったと思う。放課後、先生方の協力もあって、早く帰ってしまう所、一人もいなかった。

又この役をやったおかげで、いろいろな人に会った。寒い中を、水びたしになって、手伝ってくれた人達で、私にとって大変いい経験になった。

一回にわたって行った外まわりの清掃は、不十分ながらも、一番成果があったと思う。放課後、先生方の協力もあって、早く帰ってしまう所、一人もいなかった。